第一章　薫の物語　横川僧都、薫の依頼を受け浮舟への手紙を書く

［第一段　薫、横川に出向く］

山におはして（薫大将は比叡山にいらっしゃって）、*例せさせたまふやうに（いつもそうさせなさるように）、経仏など供養ぜさせたまふ（薬師本尊に経典や仏画を供えて、寺僧に読経させなさいます）。またの日は（翌日は）、横川におはしたれば（横川にいらっしゃったので）、僧都驚きかしこまりきこえたまふ（僧都は意外なご訪問に恐縮申しなさいます）。　＊「れいせさせたまふ」は注に＜「させ」使役助動詞。＞とある。此処での使役は従者に対してではなく、寺僧に法要をあげさせる、ということなのだろう。

年ごろ（数年来）、御祈りなどつけ語らひたまひけれど（薫大将は僧都と法事の際などに挨拶なさっていたものの）、ことにいと親しきことはなかりけるを（特に親しいことはなかったが）、*このたび（昨秋の）、一品の宮の御心地のほどにさぶらひたまへるに（女一の宮の回復祈祷に僧都が奉仕なさって）、「すぐれたまへる験ものしたまひけり（優れた効験を示しなさった）」と見たまひてより（と御覧になってから）、こよなう尊びたまひて（大将は僧都を非常に尊敬なさって）、今すこし深き契り加へたまひてければ（以前以上に親交を深めなさっていたので）、「重々しうおはする殿の（重責を負っていらっしゃる大将殿が）、かくわざとおはしましたること（よくも、このように山深くお出ましなさったものだ）」と（と有り難がって）、もて騒ぎきこえたまふ（歓待なさいます）。　＊「このたび」は、最新の事柄を指すが、女一の宮の病気平癒の為の祈祷は昨秋のことだ。

御物語など（世情に付いてのお考えなど）、こまやかにしておはすれば（話し込んで長居なさったので）、御湯漬など参りたまふ（昼食の湯漬けなどを僧都は大将に差し上げなさいます）。すこし人びと静まりぬるに（昼餉が済んで、少し人の動きが落ち着いた頃に）、

「小野のわたりに、*知りたまへる宿りやはべる（小野のあたりに、お持ちの宿家がお有りだそうですが）」　＊「知る」は＜知っている＞の他に＜領有する、管理する＞という語用があるようで、此処では僧都の答え方から逆推すると、後者らしい。

と、問ひたまへば（と大将がお尋ねになると）、

「しかはべる（はい、ございます）。いと*異様なる所になむ（とても粗末な家です）。なにがしが母なる*朽尼のはべるを（私の母である老尼が存命でして）、京にはかばかしからぬ住処もはべらぬうちに（都に大した住処もございませんので）、かくて籠もりはべるあひだは（私がこのように山籠もりしている間は）、夜中、暁にも（夜中や早朝でも）、あひ訪らはむ（近

くなら、直ぐに出向ける)、と思ひたまへおきてはべる(と存じまして住まわせております)」
*「異様」は「ことやう」と読みがある。語意としては＜風変わり＞みたいなことらしいが、自分の管理物件を「異様なる所」と言うのは＜普通じゃない所＝変な所→粗末な家＞という意味らしい。ただ、次の大将の発言が、この僧都の話を受けたものとしては意味不明なので、もしかすると、この「異様」には別の意味があって、大将はそのことに洒落て何かを言っている、ということがあるのかもしれない。が、それが何かは私には分からない。 *「朽尼(くちあま)」は＜朽ちた尼＝老い衰えた尼＞だから如何にも卑下した物言いで、僧都が母君を＜母尼＝大尼君＞と言ったものだろうが、何だか俗っぽい言い方で高僧らしくなく聞こえるが、どうなんだろう。

など申したまふ(と僧都は申しなさいます)。

「そのわたりには(あの付近は)、ただ近きころほひまで(つい最近まで)、*人多う住みはべりけるを(人が多く住んでいましたが)、今は、いとかすかにこそなりゆくめれ(今はごく僅かになっているそうですね)」 *「ひとおほうすみはべりける」は何を意図した言い方か。脈絡も無い話題の言い方に見えるが、何も注釈は無い。平安初期の小野一族の活躍を懐かしんでいるのだろうか。楽屋オチでもあるんだろうか。ただ、下に「今すこし近くゐ寄りて」という変化行動があるので、此処の「今はいとかすか」であることについて、大きな声では言えないが、と何か政変にでも絡めた洒落語用があるような書き方には見えるが、それが何かは全く分からない。

などのたまひて(と大将は仰って)、今すこし近くゐ寄りて(僧都に少し近寄って膝を進め)、忍びやかに(小声で)、

「いと浮きたる心地もしはべる(この話は、私自身がとてもあやふやな話のような気もしていて)、また、尋ねきこえむにつけては(また、あなたにお尋ね申すに付いては)、いかなりけることにかと(何の話かと)、心得ず思されぬべきに(あなたに不審がられそうで)、かたがた、*憚られはべれど(何とも気が引ける話ですが)。 *「はばかられはべれど」は下に＜なほ、たづねむ＞くらいが省かれた前置きの言い方で、此処で一文節と読んで置く。

かの山里に(その小野に)、知るべき人の隠ろへてはべるやうに聞きはべりしを(私の知人が隠れ住んでいるように聞いたのですが)、*確かにてこそは(それが確かな事なら)、*いかなるさまにて(その女がどういう事情で失踪したのか)、なども漏らしきこえめ(という事も、あなたに密かにお話し申さねばならない)、など思ひたまふるほどに(と思っていました所)、御弟子になりて(みでしになりて、その女があなたに入門を願って)、忌むことなど授けたまひてけり(あなたが其を許して、出家式をなっさた)、と聞きはべるは(と聞きましたのは)、まことか(本当の事でしょうか)。 *「たしかにてこそは～」は俄に僧都を責める口調および内容になっているように聞こえる。が、大将は前以ては常陸女が小野に居る事を知らなかったのだから、こういう言い方は作り話であり、嘘を吐いての脅しという非常に悪どい段取りだ。それだけ大将も焦っている、ということかもしれないが、これが「いかにして、さま悪しからず尋ね寄らむ」(手習巻六章七段)と考えた計略だったとすると、なかなか計算高い。 *「いかなるさまにてなども漏らし聞こえめ」と短い言い方をしているが、この「いかなるさま」は常陸女の失踪事件の事情のことらしく、であれば、是は非常に重要で、また

どこまで本当の事情を話したものか相当に悩ましい事柄だが、実際には、大将という高官が＜然るべき事情がある＞と言っただけで、仔細を聞くまでもなく僧都は震え上がったのかもしれない。

まだ年も若く(その女は、まだ年も若く)、親などもありし人なれば(親もある人なので)、*ここに失ひたるやうに(私に女の失踪の責任があるように)、かことかくる人なむはべるを(責める人もおりますので)」　＊「ここに」は注に＜薫自身をさしていう。＞とある。

などのたまふ(と仰います)。

［第二段　僧都、薫に宇治での出来事を語る］

僧都(僧都は)、「さればよ(やはり、そういう事情があったか)。ただ人と見えざりし人のさまぞかし(普通の人とは思えない様子だったからな)。かくまでのたまふは(このように仰るからには)、軽々しくは思されざりける人にこそあめれ(大事に思っていらっしゃった人のようだ)」と思ふに(と思うと)、「法師といひながら(法師の役目とは言いながら)、心もなく(深く考えずに)、たちまちに容貌をやつしてけること(急いで尼姿にしてしまったものだ)」と、胸つぶれて(と動揺して)、いらへきこえむやう思ひまはさる(どう答えたものかと思案を廻らせます)。

「確かに聞きたまへるにこそあめれ(大将殿は中宮などから女の話を確かに聞いていらっしゃるのだろう)。かばかり心得たまひて(このように女のことをご存知で)、うかがひ尋ねたまはむに(お尋ねになっているのに)、隠れあるべきことにもあらず(隠し通せるものではない)。なかなかあらがひ隠さむに(変に隠し立てしては)、あいなかるべし(話がこじれるばかりだろう)」など、とばかり思ひ得て(と僧都は、肚を決めて)、

「いかなることにかはべり*けむ(どういう経緯だったでしょうか)。この月ごろ(この数ヶ月間)、うちうちにあやしみ思うたまふる人の*御ことにや(内々に不審に思っていました人の身の上なのですが)」とて(として)、　＊「けむ」は過去事象の推量を示す助動詞語用が多いらしいが、此処では曖昧語の柔軟表現なのだろう。　＊「おおんことにや」の「や」は疑問や打ち消しの助動詞語用ではなく、対象を改めて置き直して＜やう＝様＞と客体視する言い方なのだろう。多分、「や」の音感はこの語用が原義で、疑問や打ち消しや感嘆の語意は文脈で意図されるのだろう。

「かしこにはべる尼どもの(小野に住んでおります尼たちが)、初瀬に願はべりて(初瀬寺に願掛けしまして)、詣でて帰りける道に(参詣して帰る道中で)、宇治の院といふ所に留まりてはべりけるに(宇治の院という所に泊まりました時に)、母の尼の*労気にはかに起こりて(母尼が急に体調を悪くして)、いたくなむわづらふと告げに(ひどく苦しんでいると知らせに)、人の参うで来たりしかば(従者が遣って来ましたので)、まかり向かひたりしに(私が出向きましたら)、*まづ妖しきことなむ(さっそく不思議な事が、起こりまして)」　＊「労気」は「らうげ」は＜病気。所労。＞と古語辞典にある。母尼は実際には、宇治院に泊まって病気になったのではなく、木津川あたりで変調したので、僧都が呼び出されて、宇治院で中宿りしたのだが、背景事情と

しては何方でも大差は無いのかもしれない。　＊「まづあやしきことなむ」は注に＜係助詞「なむ」の下に「はべりける」などの語句が省略。＞とある。それはそうらしいが、続く僧都の言葉は妹尼が女を介抱している話になっていて、下の「とささめきて」には＜女を裏庭で発見したが物の怪に憑かれて正気を失っていたので介抱した＞という経緯を補語して置かないと現代語文としては脱稿になる。

とささめきて(と、その女を裏庭で発見したものの物の怪に取り憑かれていて正気を失っていたので早速に介抱したという経緯を、小声で説明申して)、

「親の*死に返るをばさし置きて(妹尼は親が死に掛かっているのを差し置いて)、もて扱ひ嘆きてなむはべりし(その女を可哀想に思って介抱致しました)。この人も(その女も)、亡くなりたまへるさまながら(死んだように生気を失っていらっしゃったものの)、さすがに息は通ひておはしければ(それでも息はしていらっしゃったので)、*昔物語に(昔話にある)、*魂殿に置きたりけむ人のたとひを思ひ出でて(霊安所の死人が生き返った例を思い出して)、さやうなることにや(そういうことかもしれない)、と珍しがりはべりて(と珍しがって)、弟子ばらの中に験ある者どもを呼び寄せつつ(弟子たちの中で霊験ある者たちを呼び寄せて)、代はり代はりに加持せさせなどなむしはべりける(代わり代わりに加持をさせたのです)。　＊「死に返る」の「かへる」は＜すっかり変わる＞で、「死に返る」は＜死んでしまう＞。＊「むかしものがたりに」は注に＜散逸物語に蘇生譚の物語があったらしい。＞とある。　＊「たまどの」は＜死者の霊を祭った所。たまや。＞または＜葬送の前にしばらく遺体を納めておく殿舎。たまや。＞と大辞泉にある。

なにがしは(拙僧は)、惜しむべき齢ならねど(惜しがる歳ではないとは言え)、母の旅の空にて病重きを助けて(高齢の母の旅の空での病気に苦しむ心細さを看病して)、念仏をも心乱れずせさせむと(念仏を集中して唱えようと)、仏を念じたてまつり思うたまへしほどに(仏に回復を願っておりましたので)、その人のありさま(その女のことは)、詳しうも見たまへずなむはべりし(詳しくは分からずにおりました)。ことの心推し量り思うたまふるに(事情を推察申しますに)、*天狗木霊などやうのものの(天狗や木霊などのようなものが)、欺き率てたてまつりたりけるにや(その人を惑わして其処にお連れ申していたのだろう)、となむ承りし(とのように思っておりました)。　＊「天狗(てんぐ)」は＜空を飛ぶ獣＞という言い方の妖怪のことらしい。「木霊(こだま)」は山彦から連想される得体の知れない実体らしい。

助けて(そのようにして女を助けて)、*京に率てたてまつりて後も(此方へお連れ申した後も)、三月ばかりは亡き人にてなむものしたまひけるを(三月ばかりは死んだひとのようでいらっしゃいましたが)、なにがしが妹(私の妹で)、故衛門督の北の方にてはべりしが(故衛門督の北の方であった者が)、尼になりてはべるなむ(尼になっておりまして)、一人持ちてはべりし女子を失ひて後(一人設けていた女子を亡くしてから)、月日は多く隔てはべりしかど(何年も経ちましたのに)、悲しび堪へず嘆き思ひたまへはべるに(悲しみが消えず嘆いておりました所に)、同じ年のほどと見ゆる人の(同じ年ぐらいに見える人で)、かく容貌いとうるはしくきよらなるを見出でたてまつりて(かくも容貌のとても可愛く綺麗な人を

見付け出し申して)、観音の賜へると喜び思ひて(観音様からの授かり物と喜んで)、この人いたづらになしたてまつらじと(この人を死なせてはならないと)、惑ひ焦られて(三カ月も良い兆しが無いことに、困り果てて)、泣く泣くいみじきことどもを申されしかば(泣く泣く厳しい加持祈祷による回復を願い申しなさったので)、　＊「京に」とあるが、小野は、または比叡山は「京」なのだろうか。少なくも、道中は逢坂越えだ。如何にも御用寺社・寺僧事情を示す語用に見える。

後になむ(その後に)、かの坂本にみづから下りはべりて(坂下の小野に私も下山しまして)、護身など仕まつりしに(護身の修法などを行いましたら)、やうやう生き出でて人となりたまへりけれど(漸く生き返って人らしい応答もなさるようにお成りでしたが)、『なほ、この領じたりけるものの(まだ取り憑いた魔物が)、身に離れぬ心地なむする(離れていない気がします)。この悪しきものの妨げを逃れて(この悪霊の災いから逃れて)、後の世を思はむ(良い来世を願いたい)』など、悲しげにのたまふことどものはべりしかば(と御本人が悲しげに仰っていらっしゃいましたので)、法師にては(法師の役目としては)、勧めも申しつべきことにこそはとて(お勧め申すべき事と存じまして)、まことに出家せしめたてまつりてしになむはべる(実際に出家式をして差し上げたのでございます)。

さらに(全く以て)、＊しろしめすべきこととは(あなた様が面倒を見ていらっしゃる人とは)、いかでかそらにさとりはべらむ(どうして知り得ましょう)。珍しきことのさまにもあるを(珍しい話ですので)、世語りにもしはべりぬべかりしかど(世間話の種にもなりそうですが)、聞こえありて(この人の生存が外へ知られると)、わづらはしかるべきことにもこそと(支障があるかもしれないと)、この老い人どものとかく申して(この老人たちが申しましたので)、この月ごろ(この何ヶ月と)、音なくてはべりつるになむ(他言せずに居たのです)」
＊「しろしめす」は「知る」の尊敬語で＜お知りになっている＞だが、此処での「知る」は＜領じる。管理する。＞で、「知ろしめす」は＜面倒を見ていらっしゃる＞。

と申したまへば(と申しなさると)、

［第三段　薫、僧都に浮舟との面会を依頼］

「＊さてこそあなれ(そういうことのようです)」と(と小宰相から)、ほの聞きて(常陸女の生存をほのめかされて)、かくまでも問ひ出でたまへることなれど(薫大将はこのように自ら足を運んでまでも聞き出しなさったことではあったが)、「むげに亡き人と思ひ果てにし人を(すっかり亡き人と思い込んでいた人だが)、さは(それでは)、まことにあるにこそは(本当に生きていたのか)」と思すほど(と僧都の話に女の生存を、確信なさって)、夢の心地してあさましければ(夢のように驚いて)、つつみもあへず涙ぐまれたまひぬるを(隠しようもなく涙ぐまれなさったが)、僧都の恥づかしげなるに(僧都が此方が気恥ずかしいほど威儀を正した姿勢なので)、「かくまで見ゆべきことかは(大将たる者が、こんな姿は見せられない)」と思ひ返して(と思い直して)、つれなくもてなしたまへど(平然となさっていらっしゃったが)、　＊「さてこそあなれ」は通常文型だと＜さ(やう)にあるなり＞あたりで、是を薫大

将は「とほの聞きて」ということなのだから、この発言の主語は小宰相らしい。かなり分かり難い主語省略だ。注には＜薫の心中。小宰相君から聞いたことと一致。＞とある。

「*かく思しけることを(大将殿が、このように深くお思いだった人を)、この世には亡き人と同じやうになしたること(この世には居ない人と同じようにしてしまったとは)」と、過ちしたる心地して(と僧都は女を出家させたことに、過ちを犯した気がして)、*罪深ければ(女の因縁を見誤ったとすれば、法師として罪深いので)、　＊「かくしけるおぼしけることを」は注に＜以下「なしたること」まで、僧都の心中の思い。浮舟を出家させたことを後悔。＞とある。ということは、この「思しける」の主語は薫大将らしい。敬語遣いから「あやまちたるここちして」の主語が僧都とは知れるものの、同一文中で主語が変わるのに省いたままという書き方は、私には非常に紛らわしい。　＊「罪深し」は法師として入信を許した判断に誤りがあっては罪深い、という仏道者の言い方と取って置く。

「悪しきものに領ぜられたまひけむも(悪霊に取り憑かれなさったのも)、さるべき前の世の契りなり(そうなるべき前世からの因縁があったのです)。思ふに(思うにあの貴女は)、高き家の子にこそものしたまひけめ(高家の子女でいらっしゃるのでしょうが)、いかなる誤りにて(どういう過ちによって)、かくまで*はふれたまひけむにか(あれほどまでにさまよっていらっしゃったのですか)」　＊「はふる」は「放る」で＜放浪する＝迷い歩く＞あたりか。

と、問ひ申したまへば(と大将に尋ね申しなさると)、

「なま*王家流などいふべき筋にやありけむ(いくらかは王家の血筋のようです)。　＊「王家流」は「わかんどほり」と読みがある。「わかんどほり」は＜皇室の血統。皇族。＞と古語辞典にある。現代語に繋がる語感では無いので、全く手応えが無い。外国語か、きつい訛りのように聞こえてしまう。

*ここにも(私にしても)、もとより*わざと思ひしことにもはべらず(初めから正妻にと考えていた相手ではありません)。　＊「ここにも」は注に＜薫自身をさす。＞とある。　＊「わざとおもひしことにもはべらず」は注に＜正妻にと考えたのではない、の意。＞とある。腰の引けた言い方で、具体事情を言うとなると薫大将は歯切れが悪い。最初の勢いとは打って変わって、攻守になると曖昧な説明で、三角関係という不都合な事情は言い出しそうもない。実際の行動や全体の経緯からしても、説得力の分は僧都の方が勝っていて、薫大将が本心でどういう意図を持っているのかは不透明だが、このままではとても僧都を押し切れそうもないし、まして常陸女にどこまで迫れるものか、傍目にも危うい。

*ものはかなくて見つけそめてははべりしかど(何となく御世話申し始めましたが)、また(その女が何も)、いとかくまで落ちあふるべき際と思ひたまへざりしを(このようにまで流浪する定めの者とは存じられませんでしたが)。　＊「ものはかなし」は＜特に是という事もなく＝何となく＞だが、常陸女を求めたのは宇治姉君への未練が強くて、その形代として囲ったというのは明白な理由なのだが、僧都に対して自分の女への執着を晒すのは、薫殿の見栄が許さないのだろう。女への愛より自分の体裁を優先する、如何にも薫殿らしい対応だ。

珍らかに(普通には無いように)、跡もなく消え失せにしかば(跡もなく消え失せましたので)、身を投げたるにやなど(宇治川に身を投げたのだろうかなどと)、さまざまに疑ひ多くて(いろいろはっきりしない事が多くて)、確かなることは、え聞きはべらざりつるになむ(失踪した後も、確かな話は聞かずにいたのです)。

罪軽めてものすれば(そのように流浪する運命にあった女が受戒して、罪を軽くして成仏できるようになっているのは)、いとよしと心やすくなむ(大変結構な事と安心に)、みづからは思ひたまへなりぬるを(私自身は存じられますが)、母なる人なむ、いみじく恋ひ悲しぶなるを(母親は失踪した娘に非常に会いたがって悲しんでいますので)、かくなむ聞き出でたると(このように無事でいると聞き出したと)、告げ知らせまほしくはべれど(言い知らせたいのですが)、月ごろ隠させたまひける本意違ふやうに(皆様方が何ヶ月と隠しなさっていた意向に背くようで)、もの騒がしくやはべらむ(平穏を乱す事になるでしょうか)。親子の仲の思ひ絶えず(親子の情は断ちきれず)、悲しびに堪へで(悲しみに耐えかねて)、訪らひものしなどしはべりなむかし(きっと会いに来ることでしょう)」

などのたまひて(と大将は仰って)、*さて(そこで、事を穏便に運ぶために自分が女の意向を確かめて母親に仲介の労を取るから、女に会えるように取り計らってくれ、ということで)、　*「さて」は注に＜地の文。『集成』は「その上で。母親には知らせまいと前置きした上で直接の交渉の仲介を僧都に頼む」と注す。＞とある。このまま直ぐに母親に娘の無事を知らせれば、出家している事に大騒ぎするだろうから、事前に大将が会って女の意向をよく確かめて、母親によく言い含めて、事を穏やかに進めたい、ということだろうか。だとすれば、「交渉の仲介を僧都に頼む」のではなくて、大将が＜交渉の仲介を取る＞ので、その為に自分と女を会わせるように取り計らってくれ、と薫殿は僧都に頼む、ということかと思う。それにしても、これだけの事情を「さて」の一言で済まそうとする感性は、皆まで言わずと分かるはずとの女房の同類意識なのか、その了見の狭さは私には信じられない。

「いと便なきしるべとは思すとも(御坊が男と女の出会いを取次のは、とても不都合な役目にお思いでしょうが)、かの坂本に下りたまへ(坂下の小野へ下りて話を着けてください)。かばかり聞きて(このように生存を聞き知って)、なのめに思ひ過ぐすべくは思ひはべらざりし人なるを(普通の事のように見過ごせるとは思えない人なので)、夢のやうなることどもも(夢のような失踪期間の話も)、今だに語り合はせむ(今こそ話し合って理解したい)、となむ思ひたまふる(とのように思っております)」

とのたまふけしき(と仰る大将の様子が)、いとあはれと思ひたまへれば(とても思い入れが強いと僧都には感じられたので)、

「容貌を変へ(女自身は尼姿になり)、世を背きにきとおぼえたれど(出家したと思っていても)、髪鬚を剃りたる法師だに(髪やヒゲを剃った僧侶でさえ)、*あやしき心は失せぬもあなり(情欲が失せない者も居る)。まして、女の御身はいかがあらむ(まして、受け身の女の立場では抗し切れまい)。いとほしう(迫られれば無念にも)、罪得ぬべきわざにもあるべきかな(情交の罪を犯し兼ねない)」　*「あやしきこころ」は注に＜淫欲。＞とある。性欲が＜乱心

＞になるのは、それを禁じた僧の立場にいるからだという逆説にも見えるが、社会秩序を乱すような不貞行為が実際にあるから、確かに困ったもんではある。が、乱す可能性のある力が変化への対応力であり、即ち未来を開く力なのだから、是を楽しむ工夫が文通や贈答歌の作法として形成されているなら、せいぜいその遣り取りを盛んにする制度設計が重要だ。

と(と面会を取り次ぐのは)、あぢきなく心乱れぬ(相応しくないと困りました)。

「まかり下りむこと、今日明日は障りはべり(下山は今日明日は修行に障ります)。*月たちてのほどに(来月になってから)、御消息を申させはべらむ(御来意をお伝え申し上げます)」　＊「月たちてのほど」は注に＜『集成』は「「今日明日は」と言ってこう言うのだから、今は月末らしい。後文に螢が出てくるので、五月末と見ておく」。『完訳』は「今日は九日。来月はほど遠い」と注す。＞とある。この大将の比叡山入りの日付に付いては、手習巻六章七段に「月ごとの八日は、かならず尊きわざせさせたまへば、薬師仏に寄せたてまつるにもてなしたまへるたよりに、中堂に、時々参りたまひけり。それよりやがて横川におはせむと思して、かのせうとの童なる、率ておはす」とあり、其処でのノートにも、この文からどうして＜五月末＞と言えるのか、何かその根拠となる後述記事あるのかと疑問を呈していたが、此処に来て、その根拠が＜蛍＞ということなら、この日付は＜六月九日＞ではないのか。「来月はほど遠い」のも今さら拙速は不要で、多分、修行の妨げは厳に慎むべき事なのだろう。ただ、後文にその「来月」が＜六月＞と明示されるなら、この日は＜五月九日＞なのだろう。旧暦は現行歴より一ヶ月くらい後ろにずれる事が多いが、ときには二ヶ月近くずれることもある。五月の蛍も有り得るんじゃないかな。

と申したまふ(と申しなさいます)。いと心もとなけれど(大将は何とも頼りない気がしたが)、「なほ、なほ(ぜひ早く)」と、うちつけに焦られむも(と無闇にせがむのも)、さま悪しければ(みっともないので)、「さらば(それでは)」とて、帰りたまふ(と言って、お帰りになります)。

［第四段　僧都、浮舟への手紙を書く］

*かの御弟の童(大将は常陸女の弟の童子を)、御供に率ておはしたりけり(御供に連れて来ていたのでした)。異兄弟どもよりは(ことはらからどもよりは、他の兄弟たちよりは)、容貌もきよげなるを(見た目も美しいその童子を)、呼び出でたまひて(呼び出しなさって)、＊「かのおおんせうとのわらは」は注に＜浮舟の異父弟の小君。＞とある。手習巻六章七段にも「かのせうとの童なる、率ておはす」とあった。

「これなむ(この子は)、その人の近きゆかりなるを(その人の近い血縁者なので)、これを*かつがつものせむ(この者を取り敢えず行かせましょう)。御文一行賜へ(おおんふみひとくだりたまへ、お手紙を一言お書き下さい)。*その人とはなくて(私とは言わずに)、ただ、尋ねきこゆる人なむある(ただ、あなたを尋ねてきた人が居る)、とばかりの心を知らせたまへ(とだけお書き下さい)」　＊「かつがつ」は古語辞典に「且つ且つ」と表記があり＜何はともあれ、ともかくもの意。＞とある。　＊「そのひととはなくて」は注に＜自分薫の名は伏せて。＞とある。

とのたまへば(と大将が仰ると)、

「なにがし(拙僧は御仏に仕える身ですので)、このしるべにて(そのような出会いの取り持ちをしますと)、かならず罪得はべりなむ(必ず罪を被ってしまいます)。ことのありさまは(事の次第は)、詳しくとり申しつ(詳しくお話し申しました)。今は(この上は)、御みづから立ち寄らせたまひて(あなた様ご自身で尼庵に立ち寄りなさって)、あるべからむことはものせさせたまはむに(仰りたい事をお話しなさるのに)、何の咎かはべらむ(何の支障がございましょう)」

と申したまへば(と僧都が申しなさると)、うち笑ひて(大将は笑って)、

「*罪得ぬべきしるべと思ひなしたまふらむこそ(罪になる男女の取り持ちとお考えになるとは)、恥づかしけれ(お恥ずかしい)。ここには(私にあっては)、*俗の形にて(ぞくのかたちにて、世俗の姿で)、今まで過ぐすなむいとあやしき(今まで居たのが不思議なほど、仏道心が篤いのです)。　＊「つみえぬべきしるべ」は取り持ちが男女の仲の手引きになって、女が淫戒を破る罪を犯し、僧都もまたそれを勧めた罪を負う、という危惧だろうから、「恥づかし」は＜そういう類の男と見做されたことが面目ない＞ということなのだろう。　＊「俗の形にて今まで過ぐすなむいとあやしき」は注に＜『完訳』は「以下、自分の生来の道心にふれる。浮舟の道心を邪魔だてするなどありえない、との論法を導く」と注す。＞とある。従って、左様補語する。

いはけなかりしより、思ふ心ざし深くはべるを(幼い時から出家を願う気持ちは強くありましたが)、三条の宮の、心細げにて(故院に先立たれなさった母の三条宮が心細そうに)、頼もしげなき身一つをよすがに思したるが(頼りにもならない私一人を期待していらっしゃるのが)、避りがたきほだしにおぼえはべりて(断ち切れない絆に思えまして)、かかづらひはべりつるほどに(世情に塗れて居ます内に)、おのづから位などいふことも高くなり(次第に帝の御信任なども篤くなり)、身のおきても心にかなひがたくなどして(所帯まで持つようになり)、思ひながら過ぎはべるには(仏心はありながら俗世で生きておりますと)、またえ避らぬことも(他に避けられない縁も)、数のみ添ひつつは過ぐせど(数多く関わって過ごして来ましたが)、公私に、逃れがたきことにつけてこそ(公私において止むを得ない付き合いについては)、さもはべらめ(そうであっても)、さらでは(そうではない私自身については)、仏の制したまふ方のことを(仏が禁じていらっしゃることを)、わづかにも*聞き及ばむことは(わずかでも関わり合うという)、いかで過たじと(過ちは決してすまいと)、慎しみて(自制して)、心の内は聖に劣りはべらぬ*ものを(内心は聖人に劣り申さないのですから)。　＊「聞き及ぶ」の「聞く」は＜音声を聴く。判断する。＞ではなく＜味わう。経験する。＞で、「ききおよぶ」は＜関与する＞。　＊「ものを」の「を」は逆接の＜～であるものの＞ではなく、順接の＜～なのだから＞で下文に続くように見えるが、言い切りの間投助詞語用と見做したとしても、自分の正状態を訴える言い方ではありそうだ。

まして、*いとはかなきことにつけてしも(まして、ちょっとした男女の機微も)、重き罪得べきことは(重い罪になる出家者相手への手出しは)、などてか思ひたまへむ(どうして致

しましょうか)。さらにあるまじきことにはべり(絶対に有り得ません)。疑ひ思すまじ(御懸念無用です)。ただ、いとほしき親の思ひなどを(ただ、気の毒な親の思いなどを)、聞きあきらめはべらむばかりなむ(知らせて遣れるだけで)、うれしう心やすかるべき(私は嬉しく気が済むのです)」　＊「いとはかなきことにつけてしも」は注に＜浮舟との男女関係。＞とある。ちょっとでも男女の縁に触れたら思い罪になる、というのは、常陸女が世俗と縁を切った尼僧の立場に居るから、ということのようだが、どうもこういう戒律の言い方は、自律した節制という清廉さではなく、勝手な言い草を振り回す横暴に聞こえる。実際には強権で守られているに過ぎないのではないか。いや、強権で守られる合理性自体は正当だと思うが、詭弁は気持悪い。搦め手はお手柔らかに、というのは作法であって、共通の文化を守る者同士の中だけで通用する生活様式なので、初めから破戒を意図した者に対しては単に無防備なだけだ。

など、昔より深かりし方の心を語りたまふ(と、昔から深かった信仰心をお話しなさいます)。

僧都も、*げにと、うなづきて(僧都も、その大将の話に、なるほど、と肯いて)、　＊「げに」と納得出来る根拠は時に無いように思えるが、こう書いてあるんだから、そう言わざるを得ない。しかし、本人申告以外に客観傍証は無い。三条入道宮が後家なのは確かだが、だからといって、それが大将の仏道心が篤い事を裏付けるものではない。それでも、是で僧都は大将の仏道心を信じて、話は次の展開に進むらしい。まぁ、止めようは無い。

「いとど尊きこと(大変結構です)」

など聞こえたまふほどに(と申しなさる内に)、日も暮れぬれば(日も暮れたので)、

「中宿りもいとよかりぬべけれど(行程からすれば、小野に中宿りするのはとても都合良かったが)、うはの空にてものしたらむこそ(突然の訪問で、女が動揺するのは、失踪した女の心情を思い合わせても)、なほ便なかるべけれ(やはり避けるべきだろう)」

と、思ひわづらひて帰りたまふに(と大将は思い案じてお帰りなさるときに)、この弟の童を(このせうとのわらはを)、僧都、目止めてほめたまふ(僧都は目に止めて可愛らしいと褒めなさいます)。

「これにつけて(この子に御手紙を持たせて)、まづほのめかしたまへ(差し当たって少し縁者の来訪を仄めかしてください)」

と聞こえたまへば(と大将が申しなさったので)、文書きて取らせたまふ(僧都は手紙を書いて同時に持たせなさいます)。

「時々は山におはして遊びたまへよ(時々は当山に遊びにお出でなさい)」と(と僧都は童子に仰り)、「*すずろなるやうには思すまじきゆゑもありけり(私たちは知らぬ仲でもないのだから)」と、うち語らひたまふ(と親しくお話しなさいます)。　＊「すずろなるやう」は注

に＜僧都と小君との関係。自分は小君の姉の浮舟を出家させた師僧である、という意。＞とある。子供相手の軽口だろうが＜弟子の弟＝子も同じ＞みたいなことだろうか。「すずろなる」は＜無関係＞。

この子は心も得ねど(童子は、僧都が言った親しい仲の意味は分からなかったが)、文取りて御供に出づ(手紙を持って大将の御供に付いて横川を出ます)。坂本になれば(坂下の小野に着くと)、*御前の人びとすこし立ちあかれて(一度に馬の足音を立てて尼庵の人々を驚かすことがないように、先導の者たちは少し間を置き合って)、「忍びやかにを(静かに通れ)」とのたまふ(と大将は仰います)。　＊「ごぜん」は「御前駆(ごぜんく、貴人の外出時に馬に乗って先導する者)」のことらしい。山道だから大将も乗馬かと思ったが、挿絵では牛車になっていた。

［第五段　浮舟、薫らの帰りを見る］

小野には(小野においては)、いと深く茂りたる青葉の山に向かひて(とても深く茂った青葉の山に対して)、紛るることなく(その田舎風情とは違って)、遣水の蛍ばかりを(庭の曲水の蛍ばかりを)、昔おぼゆる慰めにて眺めゐたまへるに(昔を偲ぶ慰めにして尼姫は眺めていらっしゃったが)、例の(いつもの景色で)、遥かに見やらるる谷の軒端より(遠くに見える山から下る道が軒端越しに)、前駆心ことに追ひて(さきこころことにおひて、先払いの従者が特に上品な声で貴人通行を告げて)、いと多う灯したる火の(とても多く灯した松明の)、のどかならぬ光を見るとて(はなやかな光を見るために)、尼君たちも端に出でゐたり(尼君たちも縁側近くに出て座していました)。

「誰がおはするにかあらむ(どなたがいらっしゃったのでしょうか)。御前など(ごぜんなど、先払いの人たちが)いと多くこそ見ゆれ(とても多く見えます)」

「昼、あなたに*引干し奉れたりつる返り事に(昼に横川に干し海苔をお持ち申した時の返事に)、『大将殿おはしまして(大将殿がお見えになっていて)、御饗応のことにはかにするを(御昼膳を急に差し上げることになったので)、いとよき折なり(ちょうど良かった)』と、こそありつれ(と給仕僧が言っていました)」　＊「引干し(ひきぼし)」は＜引きのばして日に干したもの。特に、海草の類。＞と大辞泉にある。琵琶湖の水草は肥料用に藻刈りをするようなウエブ記事があったが、食用の物が当時はあったのだろうか。

「大将殿とは、この女二の宮の(大将殿とは、今上帝の女二の宮の)御夫にや(おおんおとこにや、夫君では)おはしつらむ(いらっしゃいませんか)」

など言ふも(などと尼女房たちが言うにつけても)、「いと*この世遠く(大将殿だなどと言い出して、この人たちは、まるで世間離れした)、田舎びにたりや(田舎臭い大風呂敷を言っているのだろうか)。　＊「このよとほく」とあるが、薫大将と女二の宮との結婚は薫殿27歳の春で、宿木巻八章三段には、「その月の二十日あまりにぞ(同じ二月の二十日過ぎには)、藤壺の宮の御裳着の事ありて(藤壺にお住まいの女二の宮の御裳着の祝儀があって)、またの日なむ(その翌日には)、大将参りたまひける(薫大将が藤壺にお通いなさったのです)」とあった。まだ二年前のことで決して古い話題ではない。とい

うか、むしろ是は、此処の尼女房たちが如何にも冗談めかして言いそうなこと、なのではないか。それに、「ゐなかびにたりや」の「や」は疑問の係助詞に見えるし、それは誰の疑問かといえば常陸女尼姫なのだろう。となると、此処の校訂だが、この「いとこの世遠く、田舎びにたりや」は尼姫の心中文で、その心中文は下の「今は何にすべきことぞ」まで続く、と読む方が、言い回しとの相性も良さそうに見える。

まことにさにやあらむ(しかし、横川の客人が大将というのは、本当にそうなのかもしれない)。時々、かかる山路分けおはせし時(時々、このような山道を分け入って宇治山荘に大将がお見えになった時に)、いとしるかりし随身の声も(とても特徴のあった随身の声も)、うちつけにまじりて聞こゆ(時に混じって聞こえる)。

月日の過ぎゆくままに(月日が経つほど)、昔のことのかく思ひ忘れぬも(昔のことをこのように忘れられないのも)、今は何にすべきことぞ(今さらどうにもならない)」と心憂ければ(と情けないので)、*阿弥陀仏に思ひ紛らはして(尼姫は阿弥陀仏を唱えて気持を紛らわせて)、いとどものも言はでゐたり(全く無口になっていました)。　*「あみだぶつ」は＜西方浄土に居る有難い存在＞らしい。全く分からない。因みに「薬師仏」は東方浄土の有難い存在らしい。全く分からない。が、尼姫が気の迷いを払いたくて＜ナンマイ、ナンマイ＞と呟いたような絵は浮かぶ。